

ミニ・シリーズ：湿地の自然環境（3）

その3：ラトヴィアのルバナ湖

AAI ニュース 18 号ですでに紹介したように、バルト三国の一つであるラトヴィアでは、国内最大の湖であるルバナ湖を中心にルバナ湿地帯が広がっている。この湿地帯の土地利用をみると、ルバナ湖及び養殖池を中心にその北西側と南西側に湿原が分布しており、それらを取り囲むように農耕地が分布している。そして、それらの間に森林がモザイク状に入り込んでいる。面積的には、森林が湿地帯の 36% を占め、農耕地と湿原がそれぞれ 25% 程度を占めている。湿原としては高層湿原、低層湿原及び遷移状態にある湿原が複雑に入り交じっている。さらに、河川沿いには氾濫原草地在り広がっており、湿地帯の 10% 程度を占めている。このように、各種ビオトープがモザイク状に分布しており、複雑な生態系を作り上げている。このため、地域の生物多様性が極めて高く、数々の貴重な動植物が生息している。

かつて、ルバナ湖周辺は頻りに洪水にみまわれたため、堤防の建設が進められた。水門の建設により水位のコントロールも可能になったが、湖における魚類の繁殖には年間を通して高レベルでかつ安定した水位が必要となる反面、農林業にとっては洪水後の排水を促進するために比較的低レベルの水位が望まれており両者の利害が一致しない。また、洪水がある程度制御されるようになると、それまで本地域を換羽地として利用していたマガモやコガモといった水鳥の数が激減した。また、泥炭の乾燥化はそのまま土壌化につながり、その後の植生の遷移に影響を与えてしまう。このように、経済活動のための水位コントロールによる湿地帯の乾燥化が、生物多様性保全に悪影響を及ぼすようになってきた。一方、氾濫原草地の草は刈り取られて粉碎され、家畜飼料用に利用されてきた。しかしながら、今日ではこうした利用が少なくなったため、草原に灌木類が侵入しはじめており、森林に向かっての遷移が進みつつある。これは、人間の活動が生物多様性保全にとって重要なある種のビオトープを維持している一つの例である。

このように、湖の周辺における養魚場、氾濫原草地、農耕地、植林地といった各セクターが湖の水位及び水質をめぐる周囲の生態系と密接に関わりあっており、地域における調和のとれた開発と保全を推進するためには、複雑な水位のコントロールが必要となっている。そこで、ルバナ湖の水質及び水位に影響を及ぼす因子の動態を評価することを主な目的として、我が国の開発調査が実施されている。ルバナ湿地帯の生態に関する研究には、すでに長い歴史もあるしデータの蓄積もある。日本でも北海道を中心に、泥炭地の開発や保全に関する水文学的・生態学的な調査を実施している研究者は多い。開発調査を通してこうした研究者間の交流も促進しつつ、ルバナ湿地帯における環境の現状を把握し、湿地生態系の保全と持続的な資源の利活用を目指した環境管理計画が策定されることを強く望む。

